

麻雀を語る

南部修太郎

青空文庫

1

はなし 話はだいぶ古めくが、大正十一年の秋の或る一夜のことだ。三ヶ月ほどの南北支那
 の旅を終つて、明日はいよいよ懐しい故國への船路に就かうといふ前の晩、それは乳色
 の夜靄が町の燈灯をほのぼのとさせるばかりに立ち罩めた如何にも異郷の秋らしい晩
 だつたが、僕は消息通の一友と連れ立つて上海の町をさまよひ歩いた。先づ四馬路
 の菜館で廣東料理に舌鼓を打ち、或る外國人のバアでリキユウルをす
 り、日本料理屋で藝者達の長崎辯を聞き、更にフランス租界の秘密な阿片窟で阿片
 まで吸つてみた。

「さア、もう一ぺん四馬路の散歩だ。」

と、お互に微醺を帯びて變に弾み立つた氣分で黄包車を驅り、再び四馬路の大通
 へ出たのはもう夜の一時過ぎだつた。

言ふまでもない、四馬路は東京の銀座だ。が、君子國日本のやうに四角四面な取
 締などもとよりあらう筈もなく、それは字義通りの不夜城だ。人間は動く。燈

灯は映發する。自動車は行く。黄包車は走る。そして、この東洋の幻怪な港町はしつとりした夜霧の中にも更け行く夜を知らない。やがて歩き疲れてふらりとはひりこんだのが、と或る裏通の茶館だつた。

窓際の紫檀の卓を挟んで腰を降し、お互に疲れ顔でぼんやり煙草をふかしてゐると、女が型通り瓜子と茶を運んでくる。一人は丸顔、一人は瓜實顔、其に口紅赤く、耳環の翡翠が青い。支那語の達者な友人は早速笑ひ聲を交へながら女と何やら話しはじめたが、僕は至極手持ち無沙汰である。傍の窓をあけて上氣した顔を冷しながら暗いそれを見てゐると、一間ばかりの路次を隔ててすぐ隣の家の同じ二階の窓から、鈍い巷の雑音と入れ交つてチャラチャラチャラチャラと聞き馴れない物音が聞えて來た。

「おいおい、あの音は何だい？」

暫く靜に聽耳を立ててゐた僕はさう言つて、友人の方を振り返つた。いつの間にか彼の膝の上には丸顔の女が牡丹のやうな笑ひを含みながら腰かけてゐる。が、彼はすぐに僕の指さす方に耳を傾けて、

「ああ、麻雀をやつてゐるんだよ。」

「麻雀？」

僕がさう鸚鵡返すと同時に、僕の傍にゐた瓜實顔は可憐な聲で、

「好的麻雀……」

と、微笑とともに呟いた。

今でこそ、僕もどうやら四段といふ段位をもらへるほどに麻雀にも耽り親しんでゐるが、かれこれ十年も昔の話だ。奉天城内のと或る勸工場へはひつて、或る店

先に並べてあつた麻雀牌の美しさに眼を惹かれて、

「綺麗なものですね。何か飾り物ですか？」

と、連れの人に尋ねかけると、

「いやア、ばくちの道具ですよ。日本のまア花合せですかね。」

と、幾らか笑ひ交りに答へられながらも、さすがにばくち好きな支那人だ、恐ろしく凝つ

た、洒落た物を使ふなアぐらゐにほとほと感心してゐたやうな程度で、もとよりどんな

風に遊ぶのかも知らなかつたのだが、さてその窓向から時折談笑の聲に交つてチ

ヤラチヤラチヤラチヤラ聞えてくる麻雀牌の音、それがまたあたりがあたりだけに如

何にも支那風の好ましい感じで耳に響いたものだつた。

近頃、東京に於ける、或は日本に於ける麻雀の流行は凄まじいばかりで、

マジヤンくらぶの開業は全く雨後の筍の如しで邊鄙な郊外の町にまで及んでゐるやうだが、そこはどこまでも日本式な小綺麗さ、行儀よさで、たとへば卓子の上にも青羅紗とか白ネルとかを敷いて牌音を和げるやうにしてあるのが普通だが、本場の支那人は紫檀の卓子の上でぢかに遊ぶのが普通で、寧ろさうして牌の音の高いのを喜ぶらしい、だからこそ、その時も紫檀の堅い面を打ち、またその上でひっきりなしにかち合ふマジヤンパイのおとまどむか
雀牌の音が窓向うながらそれほどさはやかに聞え、如何にも支那風の快さで僕の耳を樂しませたのに違ひない。

同じ麻雀でもそれぞれの國民性に従つて遊び方なり樂しみ方なりが自然と違つてくるのは當り前の話で、卓子の上に布を敷いて牌音を和げるといふやうな工夫は如何にも神經質な日本人らしさだが、元來麻雀とは雀の義で、牌のかち合ふ音が竹簾に啼き囀る雀の聲に似てゐるから來たといふ語源を信じるとすれば、やつぱり紫檀の卓子でぢかに遊ぶといふのが本格的で、その音を樂しむといふのもちよつと趣があるやうに感じられる。尤も、支那人は麻雀を親しい仲間の一組で樂しむといふやうに心得てゐるらしいが、近頃の日本のやうにそれを團隊的競技にまで進めて來て、いつかの日本麻雀選手權大會の時のやうに百組も百五十組もの人達が一堂に集

つて技を争ふとなれば、紫檀の卓子の上でぢかになどといふことはそれこそ殺人的なものになつてしまつて、大會ごとに氣が違ふ人が何人ともなく出来るかも知れない。とまれ、十年前の秋の一夜、乳色の夜靄立ち罩めた上海のあの茶館の窓際で聞いた麻雀牌の好ましい音は今も僕の胸底に懐しい支那風を思ひ出させずにはおかない。

2

女と、ばくちと、阿片と、支那人の一生はその三つの享樂の達成に捧げられる——などと言ふと、近頃の若い新しい中華民国の人達から叱られるかも知れないが、これは或る點まで残念ながら眞實らしい。苦力達は營營と働く、女——細君を買ひたいために、ばくちをしたいために、阿片を吸ひたいために。また將相達はなぜあれほど主權を争ひ合ふのか？ 多くの婢妾の肉に倦きたいたために、ばくちに耽る悠哉閑日月を自由にしたいために、豪華な廊房で阿片の夢に浸りたいために。で、それほどばくち好きな支那人が工夫考案したもののだけに、麻雀ほど魅力のある、

感じのいい、倦くことを知らない遊びはまア世界にもあるまいかと思はれる。近頃、歐米では一時の麻雀熱がさめてブリツヂ・ポオカアの遊びに歸つたと言ふし、日本でも花合せの技法がずつと深奥複雑でより感興深いことを説く人もあるが、麻雀には遊びの魅力は魅力として、外にあの牌に觸れるといふ不可思議な魅力がある。あの牌音を聞くといふ力強い魅力がある。だからこそ、麻雀は少し遊びを覺えると、大概の人が一時熱病的になつてしまふ。そして、全くこれほど遊び倦きることを知らない遊び事もちよつと外には無ささうだ。

一代の覇圖も夢物語に奉天城外の露と消えてしまつたが、例の張作霖は非常な麻雀好きだつたと言ふ。何でも第二次奉直戦争の時などは自分の方の旗色がよかつたせゐるもあつただらうが、戦線のことは部下任せにして置いて、宮苑の色深くお氣に入りの嬪妾や嬖臣達を相手に日もす夜もす麻雀に耽り楽しんでゐたと言ふ。で、そこはまた拔目のない所謂政商などは莫大もない金を賭けて張と卓子を圍む。そして、わざと負ける。想像すれば、始終青一色をさせたり、満貫役をつけさせたりするのだらうが、それが自然と取り入りの阿堵物になることは言ふまでもない。

「いや、何とも何とも。今日の閣下の昇天の御勢にはわたくし共まるで木っ葉微塵の有様でございましたな。」

「ふふふ、弱いなうお前等は……」

定めてあの張作霖がそんな風に相好を崩してのけぞり返つただらうと思ふと、その昔馬賊の荒武者だつたといふ人のよさも想像されて、無残な爆弾に血染められたと言ふその最後が傷ましくも感じられはしないだらうか？

張作霖と言はず、如何に支那人が麻雀を好くかといふことはいろいろ話に聞か驚くことは彼等二日も三日も不眠不休で戦ひつづけて平氣だといふことだ。僕、この遊びを覺えてから足掛け五年になるが、食事の時間だけは別として戦ひつづけたレコオドは約三十時間といふのが最長だ。それはたしか去年の春頃、池谷信三郎の家のことで、前日の晝頃はじめて翌日の夕方過ぎまで八圈戦を五回ぐらゐ繰り返したやうに思ふが、終りには頭朦朧として體はぐたぐたになつてしまつた。そして、二三日その疲れの抜け切らないのに今更自分の愚きを悔いたやうな始末だつたが、支那人が二日も三日も戦ひつづけて平氣だといふのは、一つは確に體力のせゐに違ひないが、もう一つは氣質の相違によるものだらう。言ひ換へると、支那人は技法の巧拙は別

問題として、可成り自由に延び延びと麻雀を遊び楽しむからではあるまいか？

僕思ふに、いつたい僕等日本人の麻雀の遊び方は神経質過ぎる。或は末梢的過ぎる。勿論技を争ひ、機を捉へ、相手を睨ふ勝負事だ。技法の尖鋭慧敏さは如何ほ

どまでも尊ばれていい筈だが、やたらに相手の技法に神経を尖がらして、悪打を怒り罵り、不覺の過ちを責め咎め、自分の好運衰勢にだらしく感情を動亂させるなどは甚だしばしば僕のお眼に掛かることだが、そして、僕と雖も敢へてそれが全然無いとは言はないが、その如何にもあくせくした感じは常に僕をして眉を顰めしめる。言ひ換へると、どうもゆとりが無い、棘棘し過ぎる。だから、長い戦ひに堪へ得ず、結局心身共にくたくたに疲れ切つてしまふのだらうが、思ふに、支那人の麻雀戲には彼等の風格に存するやうな悠悠味がどこかにあるのではなからうか？

3

一時、これは麻雀界の論議的になつたことだが、麻雀が技の遊びといふより以上に運の遊びであることは争へない。實際、運のつかない時と來たらこれほど憂鬱

な遊びあそびはないし、逆に運ぎやくの波うんに乗のつて天衣無縫てんいむほうに牌パイの扱あつかへる時ときほど麻雀マージャンに快くわい陶醉たうすゐを感かん
 じる時ときはない。自然しぜん、そこが麻雀マージャンの長所ちやうしょでもあり短所たんしょでもあつて、どつちかと言いへ
 ば玄人筋くろうとすぢのガンブラアには輕蔑けいべつされる勝負事しょうぶごとのやうに思おもはれる。けれど、實際じつさいは
 それこそ麻雀マージャンが人達ひとたちを魅惑みわくする面白おもしろさなので、誰だれしも少しそれに親したしんでくるといつ
 となくその日ひその時ときの縁起えんぎまで擔かつぐやうになるのも愉快ゆくわいである。そして、その點てんでとり
 わけ物事ものごとに縁起えんぎを擔かつぐ支那人しなじんが如何いかに苦心焦慮くしんせうりよするかはいろいろ語かたられてゐることだ
 が、全まく外ほかのことでは如何いかなる擔かつぎ屋やでもない僕ぼくが麻雀マージャンの日ひとなると、その日ひの新しん聞ぶんに
 出でてゐる運勢うんせいが變へんに氣きになる。で、たとへば「思おもはぬ大利たいりあり」とか「物事ものごとに蹉跌さてつあ
 り、西方凶せいはいきやう」などといふ、考かんがへれば馬鹿ばからしい暗示あんじが卓テーブル子を圍かこむ氣持きもちを變へんに動うごかすこ
 と我われながらをかしいくらゐるだ。
 滑稽こつけいなのは、日本にほんの麻雀道マージャンだうのメツカしやうの稱しょうある鎌倉かまくらでは誰だれでも奥おくさんが懷妊くわいにん
 すると、その檀那様だんなさまがきつと大當りおほあたをすと言いふ。所ところが、何なんでも久米正雄夫人くめまさをふじんしん自身の
 懷妊中くわいにんちうの運勢うんせいの素晴すばらしかつたことは今いまでも鎌倉猛者連かまくらもされんの語かたり草ぐさになつてゐるくら
 んださうだが、懷ふところに入はいつてふとるといふ八卦はつぱでもあらうか？ 少少せうせううがち過すぎてゐて、
 良りやうじん人久米正雄くめまさをならずとも、思おもはず微苦笑びくせうせずにはゐられない。いつたい誰だれでも運勢うんせい

が傾かたむいてくると、自然しぜんとじたばたし出すのは人情にんじやうの然しからしむる所ところだが、五段里見亭だんさとみとんは紙入かみいれからお守まもり札ふだを並ならべ出す、四段古川緑波だんふるかはりよくははシガアレツト・ライタアで切りき火びをする。三段池谷信三郎だんいけのやしんは骰子サイツを頭上づじやうにかざして禮拜らいはいする。僕ぼくなど麻雀マージャンはしばしば細君さいくんと口喧嘩くちけんくわの種子たねになるが、これが臨戰前りんせんまへだときつと八卦けが悪い。

「今日は奇數番號きすうばんがうの自動車じどうしゃには絶對ぜつたいに乘らないぞ。」

「向うむかに着くまで猫ねこを見みなけりや勝かちだ。」

などと年甲斐としがひもなく男一匹をとこびきがそんな下くだらないことを考かんがへたりするのも、麻雀マージャンに苦勞くろうした人間にんげんでなければ分わからない味あじかも知しれない。

4

「知らない支那人しなじんと麻雀マージャンを遊あそぶのはよつほど注意ちゆういしなければいけない。」

とは或あむかむかの消息通せうそくつうが僕ぼくに聞きかせた詞ことばだが、ばくち好きずで、またばくちの天才てんさいの支那人しなじんだけに麻雀道マージャンだうに於おても中なかには恐おそろしい詐欺さぎ、いんちきを企くてるものが可成かなりあるらしい。そして、その仕方しかたもいろいろ聞きかされたが、僕ぼくが如何いかにも支那人式しなじんしきだなど一番感ばんかん感かん

心し、且つ恐るべしと思つたのは、百三十六個もある麻雀牌の背中の竹の木目をすつかり暗記してしまふといふいんちき師のことだ。而も、その暗記の仕方といふのが、先づ日光の中で、次は曇り日、次は夕方、次は電燈、結局最後に蠟燭の光の中でといふ風に明暗の順序を追つて眼を慣らしながら研究暗記し、乏しい明るさの中でもこの木目はこの牌とすぐ分るやうに努力するのだと言ふ。言はば勝ちたいといふためのその執拗な努力、勿論外の牌を使ふことにでもなれば何の役に立たう筈もないのに、そんな骨折りをするといふ根氣よき、陰澁さ、それが外ならぬ麻雀牌のあの木目に對してといふだけに全く驚かすにはゐられない。

が、然し、それもこれもつまりは勝負事に勝ちたいといふ慾と、誇と、或は見得とからくるのかと思ふと、人間の卑しさ淺ましきも少々どんづまりの感じだが、支那人の麻雀雀ばかりとは言はず、日本人のあの花合せにさへ實に多岐多様な詐欺、いんちきの仕方があるといふのだから、勝負事といふものが存在する限り止むを得ないことかも知れない。一時麻雀競技會の常勝者としてその技法をたゞ驚歎されてゐた某が、支那人式の仕方からすれば至極幼稚な不正を行つてゐたことが分るし、結局麻雀界から抹殺されるに到つたなどは甚だ殷鑑遠からざるものとして、その心

根の哀れさ、僕は敢へて憎む氣にさへならない。同じ不正を企めるのならば、百三十六個の麻雀牌の背中の竹の木目を暗記するなどは、その努力感だけでも僕には寧ろ氣持がいい。

5

日本の麻雀も近頃は少々猫も杓子もの感じになつてしまつたが、僅か四五年ほどの間にこれほど隆盛を見た勝負事はあるまいし、またこれほど組織立つて麻雀を社會化したのも日本だけではあるまいか？ 圍碁や將碁や花合せの傳統は長い。撞球にしてもそれが今ほど一般的になるまでには二三十年はかかつてゐる。戸外スポーツにしても、野球は勿論だが、近頃それと人氣を角逐しかけて來た蹴球にしてもその今日を見るまでには慶應義塾蹴球部の隠れたる長い努力があつた。が、麻雀は忽ちにして日本の社會に飛躍した。これは一面は明に麻雀戲そのものの魅力からだ。そして、一面は空閑緑以下の識者の盡力からに違ひない。僕の知る限りでは、日本の麻雀の發祥地は例の大震災後に松山省三が銀座

裏から移つて一時牛込の神樂坂上に經營してゐたカフェ・プランタンがそれらしい。勿論、個個に遊び樂しんでゐた人達は外にもあつたらうが、少くとも麻雀戲の名を世間的に知らせたのはどうもあすこだつたやうに思はれる。その意味で、狭い路次の奥にあつた、木造の、あのささやかな洋館は日本麻雀道のためには記念保存物たる價値を持つてゐるかも知れない。

「どうも今考へると、をかしなことをやつてゐたもんだよ。」

と、佐佐木茂索は或る時僕に彼らしい靜かな笑ひを洩らしながら語るのだつた。

何でも市川猿之助と平岡權八郎が洋行歸りに上海で麻雀牌を買ひうる覺えにその技法を傳へたのださうだが、集るものは外に松山省三、佐佐木茂索、廣津和郎、片岡鐵兵、松井潤子、後に林茂光、川崎備寛、長尾克などの面面で、一筒二筒を一丸二丸、一索二索を一竹二竹といふ風に呼び、三元牌をされたあと残りの一枚を捨てると、それが楨になり、その所有者に嶺上開花の機會を與へるので捨てられなくなるといふ風な妙なルウルもあり、何しろ近頃のやうに明確な標準規約もなく、第一傳へる人がうろ覚えの怪しい指導振なのだから、ずるぶんをかしな戦ひを交へてゐたものらしい。

「林茂光がくるやうになつてから、だいぶすべてが調つて來たが、僕はその時分から大概負けなかつたよ。」

と、これも佐佐木茂索の自慢話だ。

その頃、それが賭博との疑ひを受けて、或る晩一同がその筋から取り調べを受けるやうな事件が持ち上つたが、取り調べる側がその技法を知らないで誰かが滔滔と講釋をはじめ、係官を烟に巻いたといふ一挿話もある。勿論、何の事もなく疑ひだけで済んだのだが、一夜を思はぬ所で明かしてしまつた誰彼、あまり寢覺めがよかつた筈も無いが、何でも物事の先驅者の受難の一卷とすれば、近頃の仕合せな新しい麻雀好きな面々はすべからうそれ等の諸賢に敬意を捧げて然るべきかも知れない。

6

日本の文藝的作品に麻雀のことが書かれたのは恐らく夏目漱石の「滿韓ところどころ」の一節が初めてかも知れない。無論、讀書人夏目漱石は勝負事には感興を持つてゐなかつたのであらうが、それは麻雀競技の甚だ漠然とした、斷

片的な印象を數行綴つたのに過ぎない。が、近代日本のこの優れた文人の筆に初めて麻雀のことが書かれたといふのは不思議な因縁とも言ふべきで、カフエ・プランタンで初めて麻雀を遊んだ人達に文人、畫家が多かつたといふのと相俟つて、麻雀と文藝との間には何か一種のつながりがあるやうな氣持さへする。それにさすがは文學の國支那の遊びで、役の名に清一色とか、國土無雙とか、海底撈月とか、嶺上開花とか、四喜臨門とかいふやうな如何にも詩味のある字句を使つてあるのも面白い。恐らくこれ等の字に就いての感じが分るといふだけでも僕等日本人は歐米人達よりもずつとずつと麻雀を味ひ楽しみ方が深いだらうと想像される。

さて初めに書いたやうに初めて麻雀牌を見て、その牌音を聞いたといふだけならば、近頃の麻雀隆盛にいさゝか先駆けするものだったが、初めて牌を手に入れたのは大正十四年の秋で、それから誰に教はるともなく次第に習ひ覺えて、去年あたりちよつとその熱病期だつたとも言へる。そして、近頃はだいたい技法にも自信を得て來たが、運に左右されてしまふ或る境地だけはどうにも仕方がなく、時にあまりに衰運に沈湎させられると、ちよつと麻雀にも嫌厭たるものを感じる。けれど、二三日

もたつともうそろそろむづむづしてくるのだから、この熱病生易しいことではなかなか全快しさうにもない。

相手方も勿論仲間内に多く、始終顔を合せるのが六段佐佐木茂索、三段和木清三郎、三段池谷信三郎などで、時に六段菊池寛、五段廣津和郎、七段川崎備寛、六段濱尾四郎、四段古川緑波、五段菅忠雄などといふ所、そして、そんな風に書き並べてみると、素晴らしい名人試合ばかりやつてゐるやうだが、時に手に汗を握るやうな亂牌振も見られ、颯爽たる一人拂ひ、思はず頤を解くやうな沖和もある。それに大概腕よりもより以上に口の達者な面々が多いのだからその騒々しさも以て察すべきである。そして、たとへば、たとへばと諸賢のの麻雀振も紹介する積りだつたが、ちやうど許された枚数にも達したし、あとの祟りも恐ろしいので。(昭

青空文庫情報

底本：「改造」改造社

1930（昭和5）年4月1日発行

初出：「改造」改造社

1930（昭和5）年4月1日発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号586）を、大振りにつくっています。

※「黄包車」（ワンポイソオ／ワンポオツ）、「卓子」（テーブル／たくし）、「茶館」（ツアコブン／ツアコハン）、「麻雀」（マアジャン／マージャン）など、一部のルビに異なった表記がみられますが、底本通りに入力しました。

※「茶館」のルビ「ツアコブン」の「ブ」は印刷の具合が判然とせず、「フ」もしくは「プ」にもみえます。

入力：小林徹

校正：鈴木厚司

2008年1月26日作成

2010年11月9日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

麻雀を語る

南部修太郎

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>